

日中経済交流研究会 2月例会

世界における日中製造業の成熟過程とその未来

～中国・蘇州ビジネスと日系中小製造業の戦略から～

報告者 摂南大学経済学部 准教授 田中 幹大氏

日時 2月12日(水) **場所** 道頓堀ホテル

参加者数 34名

2月例会は、摂南大学経済学部の田中幹大准教授の報告でした。まず、世界全体の貿易額は1990年末ころから増加しはじめ、2000年代後半に更に増加しており、2段階で増加しているとのことでした。日本の貿易相手国は、中国の割合が増えているが、対アメリカの割合は依然として多いこと。また、日本の輸出品目における自動車の位置づけが大変重要であることを教えていただきました。

私は、世界経済が刻々と変化し、すべてが新しいものになっているようなイメージを持っていましたが、大きな視点で見れば、意外と変わってないことが多いという印象を受けました。

中国経済については、生産面では、1990年代後半から「世界の工場」として、また消費面では、2002年頃から「世界の市場」として発展してきています。この2つの側面を押さえておかなければならないことを学びました。そして、2000年代後半からのモジュール化により様相が一変し、中国では生産・消費面ともに巨大化してきたことを教えていただきました。

モジュール化とは、製品の各部品を、繋がりのある企業間で密に情報のやり取りをしながら共に開発するのではなく、定型化された各部品を、外部を含めた広い範囲の企業から調達して組み立てる方式です。その結果、製品の低価格化が進み、また、中国ローカル企業の品質レベルも上昇し、日系企業は、価格競争において、どんどん中国ローカル企業に敗退していくこととなってしまいました。常に、変化に対応していかなければ淘汰されるということを感じ、そのことを自分自身にも置き換えて考え直す機会を得ました。

また、中国に進出している日本の大企業が、日本から共に連れてきた企業との連携だけでなく、価格競争の中で、中国ローカル企業とつながりのある日本の中小企業へ目を向けているとの話も参考になりました。



田中先生 ▲



例会風景 ▲

近年、中国の賃金が上昇にともない、チャイナ・プラス・ワンといわれる、ベトナムやインドネシア等のアセアン諸国に活路を求める企業が増えています。田中先生より、中国の賃金上昇自体が、ビジネスチャンスになるとの例を示していただき、視点を変えて考えてみることの重要性を再認識しました。

今後も、外部環境の変化が、中国へ進出している企業や、これから進出する企業に、大きな影響を与えることになるとは思われますが、結局は、どこにしようとも、現状を常に的確に把握し、状況に合せたビジネス展開ができる企業が勝ち残っていくということではないかと考えました。

田中先生が発表された内容は、経済の全体像や、過程に関する話しでしたので、私が、今まで細部の認識しかできていなかったものが整理でき、つながったような気がしました。データに基づく発表でしたので本当に貴重な話でした。ありがとうございました。

文：アイム行政書士事務所
宮本 政幸

